九州大学学術情報リポジトリ
Kyushu University Institutional Repository

アルブレヒト・デューラー遺文集（二）

Dürer, Albrecht

前川, 誠郎

https://doi.org/10.15017/2328734

出版情報：哲學年報. 27, pp.155-179, 1968-03-25. 九州大学文学部
バージョン：
権利関係：

アルブレヒト・デューラー遺文集 (二)

前川誠郎訳

はじめに
ヴェネツィア通信（第七、八信）
ヘラーへの手紙

はじめに

一、本稿は昭和四十一年一月、九州大学文学部四十周年記念論文集（三七一―四〇一頁）所載のアルブレヒト・デューラー遺文集の続稿であり、今回は主にヤーコプ・ヘラー宛書翰を収めた。

二、今回以降、東京大学および東京教育大学の好意により、前回汎例に挙げたものの他

Moriz Thausing: Dürers Briefe, Tagebücher und Reime nebst einem Anhange von Zuschriften an und für Dürer (III. Band der Quellenschriften für Kunstgeschichte und Kunsttechnik des Mittelalters und der Renaissance). Wien, 1872.

Ernst Heidrich: Albrecht Dürers schriftlicher Nachlass, Familienchronik, Gedenkbuch, Tagebuch der niederländischen Reise, Briefe, Reime und Auswahl aus den theoretischen Schriften mit Geleitwort von Heinrich Wölfflin. Berlin 1918.

の二書をも参看しうることになった。ここに深甚なる謝意を表する。

三、訳文は前回と同じく、能う限り直訳を旨とし、訳文中必要と認められる最小限度の箇処に括弧を付して文意を明確ならしめ、また意訳を試みた部分にはその旨を註記した。

ヴェネツィア通信（第七、八信）

第七信（一五〇六年八月十八日）

Grandisimo primo homo de mundo. Woster serfitor, ell schciavo Alberto Dürer disi salus suum magnifico miser Willibaldo Pircamer. My fede el aldy wolentire cum grando pisir woster sanita e grondohanor. El my maraweio, como ell possibile star vno homo cusy wu contra thanto sapientissimo Tirayburly milytes; non altro modo nysy vna gracia de dio. Quando my leser woster litera de questi strania fysa decacza my habe thanto pawra el para my vno grando kosa.

《世界最偉の第一人者にして志操大度なるヴィリバルド・ピルカーマー様に、貴下の従者にして下僕たるアルブレヒト・デューラーは御挨拶を申し上げます。忠誠と喜悦の中に私は大いなる満足をもって貴下の御健勝と御名誉とにつき承りました。貴下御一人にてこの上なく老獪なる（シラクサの暴君）トラシイ・ブーロスの許多の強者どもを対手に

勝利を収めることが如何しておできになったか、と驚き入っております。げにもそれは神の恩寵によるより他はありますまい。私がこの（コンラート・ショットの）身の毛もよだつ淫蕩面（づら）についての貴下のお手紙を拝読した際、大いなる恐怖が私を捉え、それはただならぬことと思われた次第であります（意訳）[註1]。》

しかし私は、ショットの徒党も貴下を畏怖したことと信じます、何故なら貴下がヒプフェルレを踊られると、貴下は荒々しくまた殊の他威厳がお有りですから。しかしこんな傭歩兵たちが麝香で化粧するとは、全く平仄が合い兼ねます。貴下はまた正銘の絹の尻尾（伊達男）になろうとされ、もし貴下が女たちの気に入れば、それで事は結着とお考えになられます。しかし貴下がもしも私のような好ましい人間になられるのなら、私を怒らせることもありますまいに。貴下は大勢の美人を抱え、そしてもし貴下が銘々一回宛御用になっても、貴下は一ヵ月余りでは済ませることができない程でいらっしゃる。また（Jtem）私は、貴下が私の家内に私のことをあんなにうまくお話し下さったことを、貴下に感謝いたしております、何故なら私は多くの知恵が貴下の裡に秘められているのを識っておりますので。もし貴下が今私のごとく心優しくなられたならば、貴下はそれで一切の徳をお持ちになることでしょう。またもし貴下が私を指環で悩まさないで下さりさえすれば、貴下は私に善を施されることになり、私は貴下に御礼を申します。それらが貴下のお気に入らなければ、あのペーター・ヴァイスベーバーの言うように、頭を千切って便所の中へお捨てになって下さい。こんな汚らしい仕事が私に絡まっていることを、貴下は何とお考えなのですか？

私はフェネディヒ（ヴェネツィア）で紳士（ツェンティラム）になりました。貴下が押韻をよくされるとは、私もまたよく承知しております。貴下は当地にいるわが（国の）提琴奏者たちにお似合いのことでしょう、彼らは自分た

ちで泣き出す程うまく、（貴下の詩に）作曲いたします。もし神が、わがレッヒェンマイスター嬢が（それを）聴くようお望みになるなら、彼女は一緒になって泣き出しますよ。なおも貴下の御命令に従って私は私の怒りを今一度収めて、私の習慣の通り我慢していることに致しましょう（意訳）。

しかし2ヵ月以内に私は出発することができません、何故なら私が貴下に前に書きましたように、私が出発できるよう、私はまだ（金を）持っておりませんので。そしてその故私は貴下に、もし母が借金に関して貴下の処に参りましたなら、神が私を助けて発たせて下さるまで、彼女に10 fl.（グルデン）をお貸し下さるよう、お願いいたします。その節には私は他の分と一緒に感謝をこめて謹んで貴下にお返し致したく存じます。

また（Jtem）焼き硝子（fitrum vstum, 七宝）を私は飛脚にもたせて貴下へお届けいたします。また2枚の毛氈についてはアントニー・コルプが最も綺麗で広くて安いものを私を助けて買わせてくれると申します。私がそれらを手に入れ次第、私はそれらを若いイム・ホッフに渡し、彼がそれらを貴下にお送りするように致したく存じます。また私はなお鶴の羽根をも探すつもりでおりますが、私はまだ一本も見付けていません。しかし字を書く白鳥の羽根なら沢山にあります。貴下がしばらくそれを帽子に差されては如何なものでしょうか？

また私はある出版業者に尋ねましたが、彼は最近出たギリシア語（の書物）を何も知らない、しかし私が貴下に（手紙を）書くことができるよう、彼の聞いたことを私に報せようと申しております。また（Jtem）私がどのような紙を買えばよいと貴下はお考えなのか、私にお報せ下さい、何故なら私は、我々が故郷（くに）で買っているよりも上質のものを何も知りませんので。

また（Jtem）歴史画については、イタリア人が作り、貴下の書斉（ストゥドリウム）において殊に愉しいであろうものを、私は別に何も見てはおりません。[註2] それはいつも同じです。貴下御自身の方が彼らが描くより以上に御存知です。また（Jtem）私は最近飛脚のカンテンギッセルレに託して貴下に手紙を書きました。また（Jtem）私は、貴下がクンツ・イム・ホッフとまだ一つになっておられるか、是非知り度く存じます。では御機嫌よろしう。私に代って我が僧院長に私の心からの挨拶を伝え、彼が私のため、私が守られてあるよう、そして殊にフランス病[註3]から（守られてあるよう）神に願って下さるように仰って下さい。何故なら、私が今これ以上に怖れているものを私は知らないからで、何故なら全く誰でもこれに罹り、多くの人々をそれは喰い尽し、彼らはそれで死んで行くからなのです。またシュテッフェン・パウムガルトナー、ローレンツ（・ベハイム）氏、わが美人連とそれに親切にも私のことを案じてくれる諸嬢によろしく。1506年八月18日フェネディヒにて。

ニュルンベルク市民（Norikorius cibus）
アルベルトウス・ドゥーラー

また（Jtem）エンドレス（・クンホーファー）は当地に在り、貴下に彼の心からの挨拶をお伝えするようにとのことですが、まだ本服とは行かず、金が足りなくなっています、何故なら彼の長患いと借金とが彼の一切を喰い尽して了ったからなのです。私自身彼に八ドゥカート貸しています。しかし彼に聞えぬよう、このことは誰にも仰らずにおいて下さい、さもないと彼は、私が不信の念から（言い触ら）したと思うかも知れません。彼は一人の尊敬すべき賢人として身を持しているので、誰しも彼に健在を願っていることを、貴下も御承知になって頂きたく思います。

また (Jtem) もし王 (皇帝マクシミリアン) がイタリアへ行きたいと仰るのでしたら、私は彼と共にローマへ行ければよいがなどと (etc.)、私は願っております。

註1　原文はイタリア語にラテン語とドイツ語とを交ぜたもので、文法的には殆んど出鱈目に近い戯文であるが、フランチェスコ・コロンナの「ヒュプネロトマキア・ポリフィリ (ポリフィロの夢と愛との戦い)」(一四九九年、ヴェネツィアのアルドゥス・マヌティウス書店刊) 中の語法に拠ったものといわれ、デューラーはこれで古典学に造詣の深いピルクハイマーを揶揄したのであろう。訳文はルップリヒの試訳に拠ったが、タウジンク訳とは若干相違する点がある。ピルクハイマーはローテンブルクのコンラート・ショットとニュルンベルク市との間の紛争に関し、ニュルンベルク市会よりヴュルツブルクへ派遣され、このことをヴェネツィアのデューラーへ報じたのであろう。そしておそらくその手紙の中でショットのことをトラシイ・ブーロスとか淫蕩野郎とかと呼んでいるものと推測される。

註2　古代史または旧約聖書に取材する鑑戒画で、ルネサンス期の王侯貴顕の書斎 (ストゥディオーロ) や園亭などを飾った。なお哲学年報第二十六輯所載拙稿「アルテ・ピナコテークの歴史画について」参看。

註3　Morbus gallicus 梅毒。なおデューラー工房に擬せられる木版画 (Panofsky 403)—一四九六年作—は梅毒患者を描いたもの。

第八信 (一五〇六年九月八日)

学識高く信ずべく賢明にして、多くの言語に通じ、一切の吐かれた嘘言の即座の看破者にして正しき真実の速かなる認識者、尊敬すべく令名高きヴィルボルト・ピルカーマー様。貴下の恭順なる従僕アルブレヒト・デューラーは貴下に幸運と偉大かつ相応しき栄誉とを寿ぎ奉るものであります。Cu diawulo tanto pella czansa chi te ne pare.《こん畜生、あんたの好きなお饒舌はもう結構 (試訳)》。

lo vole denegiare cor voster《私は貴下の心を悩ましてやりたい (試訳)》、私もまた百の論題をもつ辯舌家である

と貴下が考えられるように。（貴下の頭脳の）小部屋は、そこに記憶の偶像を安置する4つ以上の隅（龕）を持っているに違いありません。私は私の頭（カポ）をそれで困乱させたくありません。私はそれを貴下にお勧めいたします、何故なら私は、貴下がそれぞれにほんの小々入れておくだけ多くの小部屋は、頭の中にないと信じますので。辺境伯（ブランデンブルク伯フリードリヒ四世）はそのように長い謁見をお与えにはなりますまい。１００の論題とそして夫々の論題が１００の言葉から成り、9日7時間52分も息をつぐのに掛るなんて、私は思っても見ませんでした。その故貴下はそれを一気には述べ切れないでしょうし（etc.）、小児に返った老いぼれの繰言のように人々を退屈させることでしょう（意訳）[註1]。

また（Jtem）毛氈に関して私は一切の努力を払いましたが、しかし広幅のものは一つも買い入れることができずにおります。それらは皆狭くて長いのです。しかしまだ毎日私はそれを探しております、アントニー・コルプもまた。

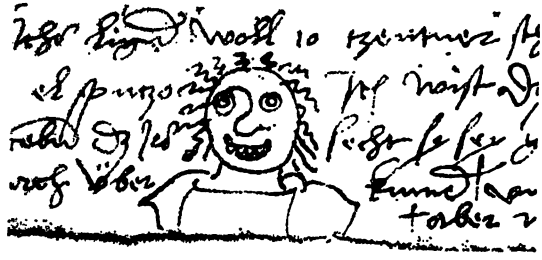
私はペルンハルト・ヒルスフォゲルに貴下の懇ろな御挨拶を伝えました処、彼もまた改めて貴下に宜しくと申されました。そして彼はすっかり悲しみに包まれておられますが、何故なら彼の息子さんが亡ったからで、それは私がこれまでに見た最も可愛らしい坊やでした。

また（Jtem）道化用の羽根飾りを私は一つも入手できずにおります。おお、貴下がもしここに御在でなら、貴下はどんなに美しいイタリアの傭歩兵をごらんになることでしょうか！　どれほどしばしば私は貴下を想起することか！もし神がお望みならば、貴下とクンツ・カーメラーとは是非それをごらんになるがよい。彼らは２７８の歯のついた鎌槍をもっていて、彼らがそれで歩兵に触れると、彼は死にますが、何故ならそれらはすべて毒が塗られているから

です。よお (Hey)、私がイタリアの歩兵になろうと思えば、私だってうまくやれる（意訳）。ヴェネツィア人は大軍を催していますが、法皇も、フランス王もまた同じです。それからどうなるのか、私は知りません。わが（ドイツ）王のことをみな大そう嘲っていますので (etc.)。

また (Item) 私に代ってシュテッフェン・パウムガルトナーに呉々も宜しくお伝え下さい。（私は）彼が奥さんを貰ったと信ずることができます。私のためポルシュト、ローレンツ氏とわが麗人たち並びに貴下のレッヒェン・マイスター嬢によろしく、そして私によろしくと言ったわが宴会堂[註2]（会員の諸氏）に私に代り礼を述べて下さい。《諸君は糞ったれだ》と仰って下さい。私は彼らにフェネディヒからアウグスプルク宛オリーヴ樹の薪を送らせて置きました。そこへ置いてくるよう致させましたが、（それは）充分10ツェントナーの重さがあります。そして、《諸君はそれを期待しようとしなかった、pertzo el sputzo（だからこの悪臭）》と仰って下さい。[註3]

また (Item) 私の板絵（ローゼンクランツビルト）が、貴下がそれをごらんになるには、一ドゥカートほしい、それはよくできていて色が美しいと申していることを御承知になって下さい。私はそれで大きな賞讃を受けましたが、利益はすくないものです。私はその間に充分



２００ドゥカートは手に入れたでしようし、また私が故郷へ帰れるよう、大きな仕事を断って了いました。そして私は、版画なら私はうまいが、しかし絵画では私は色の取扱い方を知らないと言った（ヴェネツィアの）画家たちを皆黙らせてやりました。今では誰も、彼らはこれより美しい色を見たことがないと申しています。

また（Item）私のフランス外套が貴下に宜しくと申しております。そして私のイタリア服もまた。

また（Item）貴下は、私がここで貴下を嗅げるほど、女たちの臭いがすると私は思います、そして当地では私に、貴下が道楽される時には、貴下は25才以上ではないと言い触らしておられるとか、申しています。やれやれ、（それを）倍になさい、そうすれば私はそれを信用いたしましよう。

親愛なる貴下よ、ここには貴下と全くそっくりのとても大勢のイタリア人がおります。どうしてそうなのか、私は知りませんが。

また（Item）大侯（ドージェ）と長老（聖バルトロムメオ教会の）もまた私の板絵をごらんになりました。ではこれにて御機嫌よろしう。私は本当に寝なくてはなりません、何故なら今丁度夜の７つ（午前一時）が鳴りましたので。何故なら私はほんの今までアウグスティン派の修院長（オイハリウス・カルル）、私の岳父（ハンス・フライ）、トリットリヒ夫人と私の家内とに宛てて書き、そして（それらは）全く全紙一杯になりましたので。それ故私は急ぎました。御判読下さい。（そうすれば）貴下はずっとうまく王侯たちと話がおできになれるでしよう。お寝みなさい。そしてお早よう。九月の聖母の日（八日）フェネディヒにて記す。

また（Item）貴下は私の家内と母とに何もお貸し下さらなくて構いません、彼らは今金を充分もっております。

註1　原文は難解を極めるが、ピルクハイマーのデューラー宛書信が発見されない限り、このデューラーの応酬も正しくは理解し難いものである。ピルクハイマーはニュルンベルク市会よりドナウヴェルトで開かれたシュヴァーベン同盟会議へと派遣され、席上ブランデンブルク辺境伯と折衝する処があった。彼はおそらくその詳細をデューラーに報じたのである。前出第九信参照。

註2　原文 Schtuben、即ち Herrenstube でニュルンベルク市のフローンヴァーゲに在る市参事会員宴会堂を指す。出入には身分上の制限があったが、デューラーもまたおそらく其処の有資格者であったと考えられる。前回第九信にこれを男性クラブと訳したが、ここに訂正しておく。

註3　オリーヴ材の薪は防臭剤として使われる。宴会堂でデューラーの噂が話題に上ったことに対する応酬である。

ヘラーへの書翰

第一信（一五〇七年八月二十八日）

何よりも先ず私の心からの御挨拶を、親愛なるヘラー様！[註1] 貴下の御親切なお便りを私は嬉しく拝見いたしました。しかし、私はこの処長らく熱病で苦しみ、その為私は数週間ザクセンのフリードリヒ大侯の仕事を障げられ、それは私にとって大きな損失となったことを、御承知下さい。しかし今や彼の仕事[註2]も、半ば以上できておりますので、（その内）すっかり完成するでしょう。それ故貴下の板絵[註3]については御猶余下さるよう、それを私は、私が当地で貴下にお約束いたしましたごとく、上記の大侯（の仕事）が片付き次第、完成した仕事の後で即刻作りまた出精するつもりでおります。そしてたとえ私がそれをまだ始めていないとは言え、私はそれ（板）を指物師から受取り、そして貴下が私に渡して置かれた金を支払いました。それほど多額には値しないと私には思えたにせよ、彼はそれから

すこしも値引きしようとは致しませんでした。そして（私は）それを調額師へまわし、彼はそれに白（墨の）下地をひき、（縁に）色を塗りましたが、来週にはそれに鍍金をすることとなるでしょう。（私は）これまで、私がそれを描き始めるまでに、そのためすこしでも（前金として）頂こうとは思ったことがありませんが、それは、神がそれを愛し給うなら、大侯の仕事の次のものとなる筈です。何故なら私は、厭にならぬよう、余り多くを一時に始めませんので。大侯もまた、私が自身で計劃したように、私が彼と貴下との板絵を同時に作りうるような猶余をすこしもお持ちではありません。しかし御安心下さい、私に神が私の能力に応じて与え給う限り、私は、多くの人々が作り得ぬ何かを作るつもりでいることを御承知下さるよう。ではお寝みなさい。１５０７年アウグスティヌスの日（八月二十八日）ニュルンベルクにて記す。

アルブレヒト・デューラー

註1　ヤーコプ・ヘラー（ca. 1460—1522）はフランクフルト・アム・マインの富裕な反物商で、一四八五年以降市参事会議員、一四九一年陪審員、また一四九〇、一五〇一、一五〇三年には副および正市長を勤めた名望家で、同市のニュルンベルク館の所有者として、定期市に参集するニュルンベルクの商人たちと密接な関係にあった。

註2　ザクセン選帝侯フリードリヒ賢明公（1463—1525）の発註になる祭壇画「一万人のキリスト者の殉教」（ウィーン美術史博物館蔵品番号８３５）。猶、本図については「ウィーン美術館」（講談社、世界の美術館21）中の拙稿参照。

註3　ヘラー（註1）の発註した「聖母の昇天と戴冠」を中央図とする展開式三幅祭壇画で、フランクフルト・アム・マインのドメニコ会教会のトーマス祭壇のためのもの。この祭壇の下にヘラー夫妻の墓所がある。本図の制作に関しては以下九通の書翰に詳しいが、本図は一六一五年バイエルン大侯マクシミリアンの取得する処となりミュンヒェンへと移され、一七二九年ミュンヒェン王宮の火災により惜しくも焼失、後出第八信に記された五百年間の保証は空しくなった。猶、「ミュンヒェン美術館」（講談社、世界の美術館20）中の拙稿参照。

第二信（一五〇八年三月十九日）

親愛なるヤーコプ・ヘラー様！　私が14日以内にフリードリヒ大侯の仕事を終えるだろうということを御承知下さい。引続き私はまた貴下の仕事を作りに掛り、私の習慣通り、それが完成するまで、如何なる他の絵をも作るつもりはありません。そして特に私は貴下の為中央図を私自身の手で入念に描くつもりでおります。しかし、石色（グリザーユ）で描かれる翼画外面もそれに劣らず構図されており、（私は）またそれを、貴下のお望み通り、下塗り致させました。私は貴下が私の主君（フリードリヒ大侯）の絵をごらん下さることを願っております。私は、それが貴下のお気に入ることを確信いたします。私は殆んど丸一年をそれにかけ、しかもそれで得る処は寡いものでした。その為280ライン・グルデン以上は私に与えられず、誰しも殆んどそれだけ使うでしょう。その故私は申し上げますが、もし私が貴下に殊の他御満足頂けるようそれを作らないとすれば、誰も、私が（今後）（予算を決めて）註文された品を作るよう、私を説得するものはありますまい。何故なら私はそれによって更に（利益の）よいものを失っているのですから。ここに私は板絵の寸法、長さと幅と、を貴下にお送りいたします。お寝みなさい。1508年四旬節の第二日曜日（三月十九日）ニュルンベルクにて記す。

アルブヒト・デューラー

第三信（一五〇八年八月二十四日）

親愛なるヤーコプ様！　私は貴下のこの度のお手紙を確かに拝受いたし、そこに記された、私が貴下の板絵を、私自身の考える通りに、うまく作るようとの貴下の御意見を承りました。この機に、それがどこまで進んだかを知って

頂きたく存じます。翼画は外面が石色で描き上りましたが、まだニスを塗っておらず、そして内面では、その上に描き始められるよう、すっかり下塗りされております。そして本体（コルプス）（中央図）を私は長時間をかけて極めて大きな丹精をこめ構図し、またそれは、私がそこに下塗りを始めるよう、2つの極めて良質の顔料で下描きしてあります。何故なら私は、私が貴下の御意響を承り次第、澄明と長もちとの為に、およそ4か5または6回下塗りし、また私が秤りうる限り極上のウルテルマリーンでそこに描こうと思っておりますので。また私以外の如何なるものもそこに一本の線をも描くことはならず、その故私はそれに多くの時間をかけることになりましょう。その故私は、貴下が不快がられぬことを期待し、私がこのような作品を貴下のため百と30ラインfl.（グルデン）の約束では、損失の故に、作ることができないという私の確信を書き送ることに決心いたした次第であります。何故なら私は多くを失いまた時間を無駄にするに違いないからです。しかし私が貴下に約束して来たことを、私は貴下に対して誠実に守るつもりでおります。もし貴下が約束の金額より高くは買いたくないと言われるなら、私は、それでも絵が報酬よりもはるかに良いように、それを作りましょう。しかし貴下が私に二百グルデン下さる気ならば、私は私の確信を遂行いたしましょう。そしてもし誰かが私に更に400fl.くれるとしても、私は最早や決して（同じ絵を）作ることは致しますまい。何故なら私は、極めて長い時間がそれにかかるので、それで得る如何なるプフェニンク（の利益）をも知らないからなのです。その故私に貴下の御意響をお聞かせ下さい、そうすれば私はイム・ホッフから50fl.受取りたく存じます。何故なら私はそのためまだ如何なる代金も受取っていませんので。ここに何分よろしくお願いいたしておきます。それとともに、私がこのようにして描いている貴下の板（絵）よりも私自身にとってもっと好ましい如何なる仕事をも、私

が一日として作り始めたことがないことを御承知下さい。私は、私がそれを仕上げるまで、如何なる他の仕事をもする気がありません。ただ残念なのは冬が今直ぐにも私に襲ってくることです。日が短くなると、多くを作ることができません。もう一つ私は貴下にお願いしなければなりません。もしも貴下が貴下のお近くに板絵を一枚必要としている人を御存じならば、貴下が私の処でごらんになったあのマリアの絵[註1]、それを貴下がその人にお勧め下さるようお願いいたします。もし適当な縁をその為に作ると、それは美しい板絵になりましょう。何故なら貴下はそれがきれいに作られていることを御存知だからです。私はそれを貴下の為お安くいたしておきましょう。もし私が（もう）一つ作るとすれば、私は50 fl. 以下（の代金）を受取りはしませんが、それが（すでに）できたもの故、私の家では傷むこともあるわけです。それ故私は、貴下がそれを30 fl. で安く売る全権を貴下に差上げたく存じます。しかし私がそれを売れないままにしておくよりは、私は25 fl. でもそれを渡します。確かに私の多くの糧がそのため掛りました。ではお寝みなさい。1508年バルトルメイの日（八月二十四日）ニュルンベルクにて記す。

アルブレヒト・デューラー

註1　現在ロンドンのナショナル・ギャレリーに在る「あやめの聖母」であろうと推測されている。提供せられた価格が法外に安いことから、おそらく工房作品とする推定（Panofsky II, No. 28, pp. 10〜11）がある。

第四信（一五〇八年十一月四日）

親愛なるヤーコプ・ヘラー様！　私は先日貴下に真率で批難の余地なき意見を書いて差上げましたが、それについて貴下は怒って私の従兄弟に苦情を述べ、私が食言したと申されました（由）。（私は）その後同じくハンス・イム

・ホッフから貴下のお手紙を受取りましたが、その中で私は私の先便に関し（貴下の申されることに）正に怪訝の念を覚える次第です。何故なら貴下は、貴下に対し私の約束が守られていないと私を責めておられるからです。（私は）このようなこと（中傷）から多くの人々によって免除されています、何故なら私は、私もまた他の立派な方々と並ぶよう身を持していると、（自らを）評価するが故なのです。また（私は）、私が貴下に書き送り申し述べたことを、よく承知しております。そして貴下は、私が貴下に私の従兄弟の家で、私にそれができないという理由で、良いものを作る約束をするのを欲しなかったということを御存知の筈です。しかし私は、多くの人々がなし得ないものを貴下の為作ることに同意しました。かく義務づけられた丹精を私が貴下の絵に注いだことは、貴下に上述の手紙を差出す仕儀へと私を到らしめたのであります。私はまた、もしこの板絵が完成されたならば、すべての美術家はそれに大きな満足を覚えるであろうことを、知っております。それは３００fl.以下には評価されません。私は、再び同じものを作る為に、約束の金額を3倍しても受取る気はありません。何故なら私はこれで障げられ、損をし、しかも貴下の忘恩を買っているのですから。私が持ち得る限りの最上の絵具を使っていることを御承知下さい。他の費用は別として、（私は）そのためだけに20ドゥカ〔ーテン〕のウルテルマリーンを使います。もしこの板絵が一度完成したならば、貴下御自身は、これよりも美しいものを嘗て見たことがない、と仰るであろうことを、（私は）確信いたします。そして（私は）また中央図を始めから終りまで13ヵ月以内で描き上げる自信がありません。私はまた、それが仕上るまで、それが私にとって如何ほど大きな不利益になろうとも、他の仕事をする気はありません。それならば貴下は、私がそれに費すものが幾らあれば良いとお考えですか？　貴下が私を無償で拘束されるのに、２００fl.（の代価）を認

めようとはされません。材料についての貴下のお手紙をしばしば想い出して下さい！ 貴下がもし1P（ポンド）のウルタマリーンを買われたとすれば、貴下は100fl.では入手でき兼ねたでしょう。何故なら私は10または12ドゥカ〔ーテン〕以下ではたっぷり一オンスをも買うことができないのですから。そしてその故に、親愛なるヤーコプ・ヘラー様、私の手紙は、貴下がお考えになる程、決して法外なものではありません。そして（私は）またそれで私の約束を破ってはおりません。貴下は、私が、私の出来る限りの最高の丹精をこめて、貴下のため板絵を作るべきであると、貴下に約束した筈であると私を批難されます。そんなことを私はもちろんしたことはありません、もしそうなら私は気狂いになって了っているでしょう。それなら私は、私の全生涯中にそれを仕上げ兼ねることを保証いたします。何故ならそれ程の丹精をもってすれば私は半年に顔一つを作り兼ねるからです。それなのに（貴下の）板絵は、そこに描かれた衣服と風景と他のものとを除いても、殆んど100の顔[註1]を持っております。一つの祭壇画にこのようなものを作るとは、嘗て聞かれたことがないでしょう。それを見たいと言ったのは誰ですか？ しかしその故にこそ私は貴下に書いたのです、貴下が私に許される時間次第で、この板絵を如何様にでも入念に作ると（意訳）。（私は）貴下を、もし私が貴下に対して、貴下が私の損失になると認められるようなことを約束されたとすれば、貴下はそれを強いて求めようとはされぬ（有徳な）方だと考えております。しかしそれにも拘らず、たとえ貴下が貴下の望まれた如く人になさろうと、私は私が貴下に約束したことを守るつもりでおります。何故なら私は、私のできる限り、誰からも後指をさされぬようありたいと思いますので。しかしもし私が貴下に約束したのでなかったら、私は、私が何をすべきかを、よく知っているつもりです。そしてその故に私は、貴下が私が貴下のお手紙を読まなかったと

考えたりなさらぬよう、私は貴下に（この）返事をしなければならなかった次第です。しかし私は、板絵が一度でき上りそして貴下がそれをごらんになれば、すべての事態は好転することと思っております。その故御辛棒願います、何故なら日が短くなって、貴下も御承知のように、事は急がせられないのですから。何故ならその仕事は多くまた（私は）それを減らそうとは思いませんので、貴下がフランクフォルトで私の従兄弟になさった約束を当てにしております。また（Item）貴下は私のマリアの絵のために買手をお探し下さらなくて結構です。何故ならプレスラウの司教[註2]が私にそのため72fl.を払って下さいましたので。うまく売れたものです。御機嫌よろしう。１５０８年万聖節の後の土曜日（十一月四日）ニュルムベルクにて記す。

アルブレヒト・デューラー

註1　実際は約三十人にすぎない。

註2　ヨーハン　V・トゥルツォ（一四六六―一五二〇）。後出第八信に見える同姓のゲオルクとおそらく一族であろう。

第五信（一五〇九年三月二十一日）

親愛なるヤーコプ・ヘラー様！　私は貴下のお手紙をよく拝読いたしました。そして貴下は、私が（昨年の）復活祭以後これまで撓まずまた熱心に貴下の板絵を描いて来たことを御承知下さるよう。（しかし）このような絵を四旬節以前に仕上げる自信はありません。何故なら私は一つのことに大きな労力をかけたからです。私は貴下にそのことを詳しく記すことはできませんが、私は、どれほどの努力を私がそれにかけているか、貴下が御自身でごらんになって下さるであろうと期待しております。絵具のことでは御心配なさらぬよう、何故なら私は24fl.以上の価値ある絵具でそれに描きましたので。そしてもしそれが美しくなかったならば、貴下は他処でより美しいものを見出されないで

あろうと、私は確信いたします。何故なら、たとえそれが私にとって利益とならずまた時間の損失であるにせよ、私は実際大きな丹精と長い時間とをそれに掛けておりますので。貴下は正真の処、私が４００fl.以下ではこのような絵を更にもう一つ作る気がないということを、信じて頂きたい。それに、私の望むものが、貴下から私にあたえられるとしても、長い時間においては私の生計費と出費とはそれ以上のものになるのです。貴下は、私がどれほど得をするか、お分りの筈です。しかし、貴下と私との名誉にかけて成就いたすべく、私はこれらの辛労を計算に入れるつもりはありません、というのもそれは、それが傑作かそれとも拙劣かを貴下におそらく分らせてくれる多くの美術家によって、見られるのですから、その故もう暫くの間ご辛棒下さい、何故なら板絵は下方が完全に仕上り、ただニスがかけてないだけなのですから。そして上部では子供たち（天使）に関する若干の事柄がなお仕上げられなければなりません。そして貴下がそれに満足されるであろうことが、私の大きな希望であります。私はまた、それよりも田舎向きの絵を良しとする、幾人かの美術批評家にはそれがおそらく気に入るまいかと、存じます。その向きを私は問題にいたしません、私への賞讃を私はただものの分る人々の間にのみ求めます。それ故もしメルテン・ヘスが貴下に対してそれを褒めるなら、貴下はそれだけそれに信を置かれてよいのです。貴下はまた、それを見た数人の御友人にお尋ねになるがよろしい。（彼らは）それがどのように（うまく）仕事されているかを、きっと貴下に告げることでしょう。そしてもし貴下がそれを御覧になって（それが）貴下にお気に入らなければ、私は自身でそれを持っていたいと思います。何故なら私がその絵を売りに出し、貴下にはもう一枚作るよう、私に非常に頼んで参っておりますので。しかしそれは私（の本心）からは遠いことです、私は、私が貴下に申し上げたことを、貴下に対して極めて誠実に守

るつもりでおります。（私は）また貴下を立派な方だと思い、貴下のお手紙に希望をかけ、私のそれに関する大きな丹精が貴下のお気に召すことを信じて疑いません。では私が貴下にお役に立ちうることがございましたならば、何時なりと相勤めるつもりでおります。1509年レターレの後の水曜日（三月二十一日）ニュルムベルクにて。

アルブレヒト・デューラー

第六信（一五〇九年七月十日）

親愛なるヤーコプ・ヘラー様！　ハンス・イム・ホッフ宛の貴下のお手紙から、私が貴下にまだ板絵をお送りしていないことに関する貴下の御不興を、私は承りました。それは私には実に不本意です、と申すのは私は、私が絶えず精出して板絵の仕事にかかり、またその他に如何なる別の仕事にも手をつけずにいたことを、正真の真実に誓って明記しうるが故であります。私がそのことで急ごうと思ったならば、早くに私はそれを仕上げていたかも知れません。しかし私は、大きな丹精をこめて貴下には満足を、そして私には名声を獲得すべく考えました。それが今や別の事態となったとすれば、私にはそれが残念です。そして貴下は更に、もし貴下が私に板絵を註文しなければ、このようなことは決して起らなかったであろうし、私がまた板絵を持っていてもよいとお書きですので、それに対して私は貴下に次の返答を差上げる次第です。即ちもし私がそれで貴下の友情を保持するよう、この板絵の損害を耐え忍ぶべきであったなら、私はそれをする気でした。しかるに今や一件は貴下を後悔させ、そして貴下は私に、板絵を持っているよう迫っておられるのですから、私はそれを承諾し、悦んでそういたしましようと。何故なら私は、貴下がそのため私に下さったであろうよりも100fl.余計に欲しいと思うからなのです。何故なら私は同じものをもう一枚作る為に

は、今後四百グルデンをすら受取る気はありませんので。その故（私は）、私が以前にハンス・イム・ホッフから受取った百グルデンを直ちに返却いたしました。しかし彼は貴下の指図なしには元通りそれを受取ろうとは申しません。その故この仁もしくは貴下御随意の誰かに貴下が１００fl.を受領するようお書きになって下されば、私は直ちにその人にそれを弁済いたすつもりです。そうすれば（貴下は）この板絵のため如何なる損失も後悔もせずに済むというものです。私にとって貴下の御好意は板絵よりもはるかに大切です。貴下にとって快きことのうちに何時なりとも貴下の従順なる下僕。１５０９年マルガレータの〔前〕の火曜日（七月十日）ニュルムベルクにて。

アルベルトゥス・デューラー

第七信（一五〇九年七月二十四日）

親愛なるヘラー様！　私に宛てられた貴下のお手紙を、私は拝見いたしました。そして貴下が私から板絵を断ろうとしたのは貴下の御意嚮ではなかったと書いておられるので、それに対し私は、私が貴下の御意嚮を理解できないということを申し上げます。しかし貴下は、もし貴下が板絵を註文しなかったならば、最早や二度と（私と）契約したくない、また私が私の欲する限りその絵を持っているが良いなど（etc.）と（先きに）お書きでしたので、私は、この一件が貴下を後悔させたとしか他に考えられず、そこで私は先便で貴下に（あのように）お返事したわけなのです。しかしハンス・イム・ホッフの懇願もあり、貴下が板絵を私に発註されたことや、また私がこの絵が他処よりもフランクフォルトに在ることを欲したという事情を考慮し、私は、私がそれを手放したいと思うより百グルデン安く提供すべく（イム・ホッフを通じて）貴下に同意いたしました。何故ならたとえ貴下が最初私と１３０fl.で契約され

たとは申せ、貴下には、その後私が貴下に、そして貴下が私に書いたことが、お分りの筈ですので。そして（私は）、それが私に契約された通りに私がそれを描き上げるべきであったし、また半年間で（それが）仕上っておるべきであったと確に思います（意訳）。しかし貴下の慰労もあり、また私がそれで貴下に奉仕しようと欲したこともあって、私は今や一年以上も長くそれに掛り、そして25fl.以上のウルトラマリーンをその中に塗ったのです。そして（私は）善き真実にかけて貴下に申し上げることができますが、貴下がこの板絵の代として私に下さるもので、私は私自身（の財産）を失うことも有りうるのです。一を得て三を費すことに私は最早や耐えられません。私は今、貴下が前もって私の損失をそれほど大きいと見積もられなかったことを知るが故に、そして私が貴下からよりも少くとも100fl.多くそれから入手しうるにも拘らず、私は貴下に直ちに板絵をお送りする用意があります。そしてもしそれが貴下のお気に召し、そして貴下がそれを感謝して受納されることを欲されるならば、貴下はまた、それが代価に相応しくそして私がその為に欲する200fl.よりも多くの価値があることを認められるでしょう。しかし若しも、貴下がそれ（板絵）を御覧になって、この私の申出が貴下にとり受入れ難くまたお気に入らなければ、貴下は直ちにこの板絵をフランクフォルトで再び私の自由にさせて頂きますよう。私はそれを、上に記されてあるごとく、すくなくとも100fl.高く売ることができますが、しかし私は、貴下がそれを入手されたならば、貴下は感謝して私の申出を受容れられるであろうと思います。（私は）これからそれを入念に荷造りいたしましょう。その間貴下は貴下の御意嚮をハンス・イム・ホッフにお報せになることができます、そしてこの仁が私に貴下に代ってこのことを約束するならば、私は彼に即刻板絵を引渡したく存じます。そしてもし私が、そうすることで貴下に謝意を表することを考えていなけれ

ば、私はそれでもっと大きな利得を収めることもできるのです。しかし貴下の御好誼は私にとってこのような僅かな金銭よりも大切です。しかし（私は）、貴下が私ほどそれ（金）を必要とはせられないが故に、貴下が私の大きな損失をお望みではないことを、信じます。では御機嫌よろしう。ヤコブの前の酒の火曜日（七月二十四日）ニュルンベルクにて記す。

アルブレヒト・デューラー

第八信（一五〇九年八月二十六日）

先ず心からの御挨拶を、親愛なるヤーコプ・ヘラー様！　貴下の最近のお便りに基き、私は貴下に板絵を充分に包装しまた不慮の事態に備えた上で発送いたします。（私は）それをハンス・イム・ホッフに引渡し彼は私に更に百グルデン払ってくれました。そして私の誠実にかけて、私がそれにかけた時を間空費したことはさて措き、私がそれで私自身の金を損したということを、お信じになって下さい。当ニュルムベルクではそのため三百グルデンを私に払おうと申しました。もし私がそれを貴下に好意と奉仕との為にお送りしたのでなければ、この１００fl.は私に大いに幸いしたことでしょう。何故なら貴下の御好誼を持ち続けることを私はその１００fl.よりも高く評価するからなのです。私はまたこの板絵を全ドイツ中の如何なる他の場所よりもフランクフォルトに有ちたく存じます。そしてもし貴下が、私が不当に振舞い、支払いを貴下の自由に任せなかったとお考えならば、（それは）貴下がハンス・イム・ホッフを通じて、私が板絵を私の欲する限り（手許に）留めておいてもよいとお書きになった故なのです。さもなければ、たとえ私がより大きな損害を蒙ったとしても、私は悦んでそれを貴下に引渡して了ったことでしょう。しかし私は、もし私が貴下に何かを10fl.で作ることを約束し、他ならぬそれが20fl.かかったとすれば、貴下御自身は私の損害を願

ったりはなさるまいという貴下への希望をもっております。故に私は貴下に、私が貴下から当然頂戴できる（代金）よりも１００fl.すくなく受取ることで御満足下さるようお願いいたします。そして私は貴下にこの板絵を即刻力づくで私から取上げようとした人のあることを申し上げましょう。何故なら私はそれを、貴下が御覧になるように、大いなる丹精をこめて描いたからです。（それは）私の入手し得た最上の絵具で作られております。それは良きウルトラマリーンで下塗りし上塗りして描き上げられています、５または６度も。そしてそれがすでに描き上げられた後で、それが長期間保つよう、私は更に二重に上塗りいたしました。（もし）貴下がそれを綺麗に保たれたならば、それが５００年間綺麗にまた新鮮にもつであろうことを私は確信いたします。何故ならそれは普通に作るように作られてはいないからです。故に、それに触れたりその上に聖水をかけたりしないよう、それを綺麗に保たせて下さい。私は、それが酷評されることはないと信じますが、もしその時はそれは私にとって余りにも辛いことでありましょう。そして私は、それが貴下のお気に入ることを確信いたしております。これほど多くの仕事を含む更にもう一枚の板絵を作るよう、誰も私を動かすことはできない筈です。イェルク・タウジィ氏[註1]は自身で私に、この絵の寸法と丹誠と（人物の）大きさとで風景中に一幅のマリアの絵像を作るよう依頼されました。それについて彼は私に４００fl.を支払うと申されます。それを私は彼にきっぱりと断りましたが、何故なら乞食の真似はしたくありませんからね（意訳）。普通の絵なら私は一年に一山作る気がありますが、一人にそれをすることが可能だとは誰も信じないでしょう。このような絵では儲けることもできるのです。しかし入念な推敲は即座には参りません。その故私は私の版画を期待いたします。そしてもし私がこれまで（版画を）やっていたとすれば、私は今日１０００fl.以上裕福になっている

ことでしよう。また私が私自身の費用で中央図のため新しい縁をつくらせ、それが6fl.以上も私の負担になったことを御承知下さい。そして（私は）その古い縁を毀して了いましたが、何故なら指物師がそれを粗末に作っていたからです。しかし私はそれ（新縁）を（蝶番で）留めてありません、何故なら貴下はそれ（板絵）を引取りたくないと言われたからです。そして貴下が、絵が弾かないように、帯を締めつけさせられるのは、大へん結構でしよう。そして板絵を据付けようとする際には、板絵を2または3指幅だけ前方へ傾けて下さい、そうすればそれは（反射）光から遮られてうまく見えます。そして私が1年、2または3年して貴下の許へ行くことがありましたら、もし板絵が充分乾いておれば、それを下ろさなければなりません。その時私は、他処では作り得ぬ特別のニスで改めてそれを新しくニス引きしたいと思っております、そうすればそれは以前よりもう100年長くもつでしよう。しかし他の誰にもそれ以上ニス引きさせないようにして下さい、何故なら他のニスはすべて黄色で、そして貴下の板絵を傷めることになるでしようから。私が一年以上もかけて作ったものが万一傷むということは、私自身には辛いことでしよう。そして貴下がそれを組立てさせられる際には、それが傷かぬよう、御自身でその場にいらして下さい。入念にそれをお扱い下さい、何故なら貴下は御自身で御当地の、または外国の、画家たちから、それがどのように作られているかをお聞きになるでしようから。そして私から御当地の画家マルティン・ヘッスによろしくお伝え下さい。私の家内は貴下から酒手を頂戴するようにと（私に）願っておりますが、それは貴下の思召しに任せます。私は貴下に対しそれ以上お願いはいたしません（etc.）。では御機嫌よろしう。そして御判読下さい、私は急ぎました。1509年バルトロマイの後の日曜日（八月二十六日）ニュルムベルクにて。

アルブレヒト・デューラー

註1. ゲオルク・トゥルツォ（一五二一歿）。フッガー家の一員で鉱業に従事した。

第九信（一五〇九年十月十二日）

親愛なるヤーコプ・ヘラー様！ 私は貴下に私の板絵がお気に召したと伺って、私がそれに私の辛苦を注いだのが徒労でなかったことを悦んでおります。また私は、貴下が支払いに満足しておられることを嬉しく思い、そして（それも）当然なのです。何故なら私は貴下が私に下さったよりも100fl.多く頂くこともできたのですから。しかし私は（固執）しようとはせず、私はそれを貴下にお返ししました。[註1] 何故なら私はそうすることにより御当地における貴下の御厚情を維持したいと願っておりますので。私の家内は貴下にいたく感謝しておりました。貴下がお贈り下さったお心尽しのお品を、彼女は貴下のため身につけたいと申しております。また私の弟（ハンス）も、貴下が彼に酒手として贈られた二グルデンに関し貴下に感謝しております。ここに私は貴下御自身に対してもあらゆる敬意をこめて御礼申し上げます（etc.）。貴下は私に、貴下があの板絵をどのように（外枠で）[註2]装飾すればよいかとお書きですので、私はここに、もしそれが私のものであるのなら、私がそれを作りたいと思う私の意見を小々図示して、お送りいたします。しかし貴下のお望み通り貴下はなさって宜しいのです。では何時までも御健勝に。1509年ガリの前の金曜日（十月十二日）。

アルブレヒト・デューラー

註1 結局二百グルデンと妻および弟ハンスに対する若干の謝礼とで、この二年有余に及ぶ交渉は落着したことになる。当初の契約額百三十グルデンを僅かに七十グルデン上廻ったにすぎない。

註2 祭壇画の周辺を更に彫刻や絵画で飾るのが普通で、例えばウィーンの「聖三位一体の礼拝」（蔵品番号838）のためにデューラー自身が考案した外枠が、現在ニュルンベルクのゲルマン国民博物館に遺っている。